

株式会社ハッピーブレイン

合志市御代志1661-1ルー口合志303号 ☎096(344)0007



えスポーツを通じてサポート事業を障がい者や高齢者向けに行なっています。毎月のオンラインイベントの他、年に数回会場を設けてえスポーツ大会を開催し、参加者は全国から集まっています。

以前は理学療法士として16年間リハビリの仕事をしていました。患者さんと向き合う中で、退院しても閉じこもる人が多いことに気付き、障がいがある人が社会参加できるものはないかと模索していました。

そんな時、えスポーツに出合っ「これだ」と思い、仲間たちと一緒にハッピーブレインを立ち上げました。同じ土俵で勝負するので、誰もが対等にコミュニケーションが

「ごちゃまぜの世界をつくりたい」



代表取締役
池田竜太さん



えスポーツをする参加者。誰もが参加できるようなゲームの制作にも取り組む

取れることが強みです。重度の障がいがあることも持つ両親から「けんかや仲直りをする機会など、学校に行かないと経験できないことをえスポーツで体験できて良かった」と言われた時は、すごくうれしかったです。

えスポーツはさまざまな特性を持つ人とつながることができる新しい可能性を秘めています。人と人との交流を通じて、自分のさらなる可能性を見出してもらいたいと考えています。

障がいの有無にかかわらず「ごちゃまぜの世界をつくる」。そこにたどり着くために、これから進み続けます。

障がい者支援施設 サニーサイド

菊池市泗水町南田島1791-1 ☎0968(38)4448



施設長
宮崎嗣大さん

「障がいに対するイメージを変えたい」

16年前からアート活動をしています。既存の文化芸術にとられない自由な発想で創作する「アール・ブリュット」(生の芸術)を知り、ある利用者の絵がアール・ブリュット展に選ばれたことから、少しずつ活動が盛り上がっていき

ました。

障がいのある人がメディアに取り上げられ、評価されていることに衝撃を受けました。利用者の中には社会で苦い経験をして入所している人もいます。絵を描くことで社会に認めてもらえるという気付きの機会になりました。

アート活動を始めてからは利用者の心が穏やかになりました。強気な性格が絵を描くことで余裕が生まれ、利用者



6年前からは利用者の絵画を企業に貸し出す『レンタルアート』も始めている

間のトラブルが減りました。内気で恥ずかしがり屋だった利用者は、絵を描き始めてから自己表現をするようになりました。

サニーサイドでは通年ギャラリーで絵の展示をしたり、秋まつりなどの地域交流イベントを開催したりしています。実際に関わる場所を増やすことで、障がいに対する理解を深め、イメージを変えることができると考えています。

障がいと一言でいっても、いろいろなパターンがありま

ボランティアグループ きくよう虹の会

菊池郡菊陽町久保田2596 ☎096(232)4824 ※菊陽町福祉支援センター内



代表
川端フジノさん

「障がいは一人一人の個性であり特性」

民生委員・児童委員として活動をする中で、障がいのあることもたちやその親と接する機会がありました。話を聞いていくうちに「障がいのある人の自立を支援したい、正しい理解を広めたい」という思いに駆られ、約30年前に『きくよう虹の会』を立ち上げました。

月に2回、障がいのある人とその家族、ボランティアの皆さんで和太鼓の練習やレクリエーションを行ない、町内外のイベントで練習の成果を披露しています。演奏後には、地域の皆さんに声を掛けられることもあり、みんなとてもうれしそです。

今では太鼓が叩きたくて待ち切れずに準備を始めるメン



きくよう虹の会では全員が平等。演奏の準備や片付けも全員で行なっている

バーもいます。そんな彼らの笑顔が私にとっても活動の原動力になっています。

活動を通じて、障がいへの正しい理解が広まれば地域でのつながりもできると思っています。障がい者ではなく、人の見た目がみんな違うように、障がいも個性であり特性です。ボランティアの皆さんも壁をつくることなく、対等な関係を築いています。

『虹の会』という名前にはそれぞれの色(個性)を持つ人が一つになれば、虹のように光り輝くという意味があります。これからも活動を通じて、誰もが認め合う社会をつくるお手伝いをしたいですね。

踏み出すことで、世界は変わる

Shoko Takahashi
たか はしろう こ
(株)CREIT 代表 高橋尚子さん

17歳で交通事故に遭い、手足の自由を失った高橋さん。辛い経験をしながらも、社会的な障壁を除くための情報発信を続けています。大切にしているのは“心のバリアフリー”でした。

交通事故後、5年くらいは心が前向きになれない時期が続きました。「生きる意味ってあるのかなって」。そのモヤモヤを打破してくれたのが、ある美容師さんとの出会いでした。美容室は2階にあったのに、車いすごと私を持ち上げて店まで運んでくれて。本当にうれしかったことを覚えています。

このことがきっかけで、私と同じような境遇の人がもっと外の世界に目を向けてほしいと思うようになりました。現在は各種SNSで自身の経験やバリアフリーの重要性を発信しています。

近年は合理的配慮が義務化されるなど、少しずつ法律の整備は進んでいます。実際はあまり変

化を感じないのが現実です。だからこそ、お互いが相手を思いやり、理解しようとする“心のバリアフリー”を広げていく必要があります。

うまくサポートしたいと思うあまり、声を掛けられず無関心を装ったり、過剰に手伝ったりすることもあるかもしれません。でも声を掛けることで救われる人がいます。心掛けひとつでバリアは乗り越えられると思うんです。

障がいの“ある”・“ない”にかかわらず手を差し伸べる。そんな社会になってほしい。勇気を持って一歩を踏み出すことで、階段も段差も、どんなバリアも、きっとなくすことができると私は信じています。